

曹禺と南開新劇団

瀬戸 宏

[要約]

本稿は、中国現代演劇、現代文学の双方を代表する劇作家である曹禺が劇作の処女作であり代表作の一つである『雷雨』を24歳で発表するまでの劇作家としての成長過程を、彼が中学時代（日本の中学、高校双方を含む）に参加した南開新劇団での活動を中心に考察したものである。1. はじめに、2. 曹禺の家庭環境、3. 曹禺幼少年期の文化環境、4. 南開学校と南開新劇団、5. 南開学校での曹禺、その文学的成長、その文学的成長、6. 曹禺と南開新劇団、7. 『争強』を巡って、8. 南開新劇団の活動が曹禺に与えた影響、の8項目に分けて記述した。特に、曹禺の文化素養の重層性とイブセンやゴールズワージーの影響を強調した。

1. はじめに

曹禺 (CAO Yu) が中国現代演劇、現代文学の双方を代表する劇作家であることは、よく知られている。曹禺は 1934 年 24 歳の時に『雷雨』を発表し、まもなく高い評価を受ける。それ以後も、『日の出』・『原野』・『北京人』などを次々に発表し、中国を代表する劇作家としての地位をかちえた。しかし、曹禺の伝記研究は日本ではあまり進んでいない。

曹禺が文学および演劇の基礎を築く重要な過程として、南開新劇団との関わりがかねてから指摘されている。本稿では、南開学校在学、南開新劇団参加時期を中心に『雷雨』発表以前の曹禺を考察し、『雷雨』誕生の基盤となる彼の文学、芸術素養の性格を明らかにすることを試みるものである。

2. 曹禺の家庭環境

曹禺と南開新劇団の関係を分析する前に、まず曹禺の家庭環境を確認しておきたい。

曹禺は 1910 年 9 月 24 日 (旧暦 8 月 21 日) 天津で生まれた (1)。本名は万 (萬) 家宝である。曹禺という筆名は、本名の萬を艹と禺に分解し、艹 (草字頭、草は cao) と同音の曹を当てそれに禺を組み合わせたものである。本稿では、原則としてすべて曹禺と呼ぶことにする。

曹禺の父親は万徳尊といい、1873 年 (同治 12 年) に生まれ、15 歳で科挙試験に合格して秀才となり、神童と呼ばれたという。清末の 1904 年 (光緒 30 年) より日本の陸軍振武学校、士官学校に留学した。同級生に、後に著名な軍閥となった閻錫山がいる。万徳尊の出身地は湖北省潜江県で、曹禺の原籍も潜江だが、曹禺自身は一度も潜江に行ったことはなかった。潜江は省都武漢から西に 154 キロほど離れ、現在は省直轄県級市だが、ザリガニ (龍蝦) が特産品であるなど、今日でも農村の雰囲気が残っている都市である。現在、潜江には巨大な曹禺記念館が建てられている。国務院科学技術部長 (科学技術相)、中国政治協商会議副主席、致公党主席を務めた万鋼 (1952～) は曹禺と万鋼の高祖父 [曾祖父の父] が兄弟という曹禺の遠縁の親戚である (2)。

万徳尊は 1909 年に帰国した後、直督衛隊標統などの軍職に就き、袁世凱、黎元洪などに仕え天津に居住した。帰国二年後に辛亥革命が起こり清朝は滅亡し 1912 年に中華民国が成立するが、万徳尊の地位に変化はなかった。辛亥革命の性格により、清朝の旧体制がほぼそのまま民国に横滑りしたのである。万家は潜江で明末以来の歴史のある大家族の旧家だが、万徳尊が育った家庭は貧しく、そのためか万徳尊は故郷に好感を持っていなかったと伝えられる。貧困のため一族の中で不愉快な思いをすることが多々あったのであろう。潜江のある人が所用で天津に行き万徳尊を訪ねたところ、召使いにここは万家ではない、と言わせて追い返したという (3)。

万徳尊は日本留学前に潜江ですでに結婚しており、曹禺には姉の家瑛と兄の家修とがいた。家瑛は曹禺より7、8歳年上、家修は5、6歳年上でいずれも潜江生まれである。しかし家修、家瑛の母親は曹禺の母親ではなく、万徳尊は最初の妻を潜江に残して留学した。後に1916年曹禺が数え年7歳の時に家修、家瑛も天津に出て来ると、潜江との関係は途絶え、最初の妻がどうなったかは今日では不明になり、燕氏という名が伝わっているだけである。万徳尊が日本に留学する時彼の両親（曹禺の祖父母）は健在で、最初の妻は万徳尊の両親と共に万家で暮らしており、比較的早く逝去したという。正確な没年はわかっていない。曹禺の家族も最初の妻を話題にすることもなく、曹禺は後年、彼女がどうなったか、彼自身もまったくわからない、と語っている。盲人であったともいう。

曹禺の母親は、万徳尊の二番目の妻で天津で結婚し、薛氏としかわからない。万徳尊が薛氏と結婚した時、最初の妻はまだ健在だったようである。薛氏は妾ではなく、正妻の扱いを受けていた。今日からみれば重婚だが、当時の中国ではこのような結婚は違法ではなく、社会的にも許容されていた。しかし薛氏は曹禺を生んだ後3日で産褥のため逝去してしまい、曹禺は乳母に育てられた。生後3日で母親と生き別れる、という情景は、後に『雷雨』に取り入れられている。

薛氏には双子の妹がおり、万徳尊はまもなく曹禺のためもあり彼女を娶って三番目の妻とした。彼女は名前がわかっており、薛咏南という。薛咏南は曹禺の面倒をよくみて、曹禺は長い間薛咏南を本当の母親と思っていた。薛咏南は、曹禺に大きな影響を与えることになる。なお曹禺は多くの中国人と同様に幼名を持っており、添甲という。

1915年曹禺が6歳の時、曹禺に衝撃を与える出来事が起きた。薛咏南と曹禺の乳母がある時口げんかし、乳母は腹いせに曹禺に、薛咏南は本当の母親ではない、本当の母親はあなたを生んで3日後に死んだのだ、と告げたのである。だからといって曹禺と薛咏南の仲が悪化することはなかったが、曹禺はこの後しばしば実の母親がいない孤独、悲哀の感情にひたることになった、と回想している。

万徳尊は中級軍人としてそれなりの地位を築くが、概して不遇であった。万徳尊はまもなくアヘンを嗜むようになり、1928年2月9日55歳で逝去した。

万徳尊は不遇になって以後、長男の家修に立身出世の期待をかけた。しかし家修は父親の期待に応えることができず享楽にふけるようになり、そのため万徳尊はしばしば家修を叱りつけ、時には殴った。二人の関係は非常に悪く、お互いに憎みあっていた。家修と曹禺兄弟の関係は悪くはなかったが、家修は父親がいない時徳尊を口汚く罵りそれを何度も聞かされた、と曹禺は語っている。家修は天津政法学院を卒業したが、特に何をするでもなく35歳で逝去した。

姉の家瑛は、曹禺とも継母の薛咏南とも関係がたいへんよかった。家瑛はまだ幼かった

曹禺に字を教え、『西遊記』の話などさまざまな民話、伝説を曹禺に語ったという。しかし、家瑛の結婚は不幸で、夫とも姑とも関係が悪く、しばしば万家に帰ってきては継母の薛咏南に泣いて苦しみを語っていた。家瑛は結局 30 歳で逝去した。家瑛の若すぎる死は、曹禺に衝撃を与えた。

曹禺の家庭は、このように封建（前近代）要素が濃厚で暗い雰囲気満ちていた。この雰囲気は、曹禺に世界と人生に対する疑問を抱かせないわけにはいかなかった。一方で、曹禺の家庭は父親が郷里の潜江から遠く離れた天津で居住していたため、この世代にありがちな大家族ではなく、夫、妻とその子だけで構成される核家族でもあった。（ただし、軍人である万家には、車夫、女中、料理人その他多数の使用人がいた。）父親の代に初めて天津に出てきたため、曹禺家の周囲にも一族親戚はほぼ皆無であった。天津という町も歴史は古いが 19 世紀末以降急速に人口が増え、新興都市といってもよく、租界もありそこから西洋の新しい文化が流れ込んでもいた。曹禺は万徳尊の勤務の関係で 1917 年 10 月から 1918 年初めの数ヶ月、宣化（現、河北省張家口市宣化区）に居住したものの、基本的に清華大学入学の 1930 年まで天津に育った。このような家庭、社会環境は、曹禺に複雑な影響を与えた。『雷雨』の周朴園は万徳尊の、周萍には家修を思わせるところがあり、『雷雨』の周家は封建色彩が濃厚だが、一方で核家族としての新しさも併存している（4）。『雷雨』のこのような内容は、明らかに万家が置かれた環境の反映であろう。

3. 曹禺幼少年期の文化環境

曹禺の幼少年期を、文化環境を中心に確認しておきたい。

曹禺がまず接した文化は、演劇であった。継母の薛咏南が芝居好きで、しばしば曹禺を連れて芝居見物に通ったのである。4 歳頃（5）から、京劇はじめ天津などで観ることのできる河北梆子、山西梆子、唐山落子などの地方劇を観たという。曹禺の回想では、文明戯を見るのが最も多かったともいい、『椿姫』を改訂した『新茶花』などの演目が記憶に残っているという。文明戯は早期話劇ともいい、中国伝統演劇と話劇（現代演劇）の中間形態の演劇で、当時としては新しさ、ハイカラ（文明）味があった（6）。曹禺が芝居を見始めた 4 歳頃すなわち 1914 年頃が全盛期で時事問題や当時の通俗小説を積極的に取り上げていた。文明戯の中心は上海だったのだが、天津は港町で、その関係で文明戯劇団が巡演に来ることもあったのであろう。また天津でも文明戯の劇団が存在していたかもしれない。文明戯をはじめ幼少年期に曹禺が観た芝居がどのようなものであったか、その考察は今後の研究の課題である。

ともあれ、曹禺の文化環境の基底には、京劇などに代表される中国伝統文化があることには、注意しておきたい。

1916年、7歳になった曹禺は、私塾で学び始めた。父親の万徳尊は学校を好まず、家庭教師の方式で教育を受けさせたのである。「三字経」「百家姓」から始まって、「論語」「孟子」「大学」「中庸」の四書、唐詩など典型的な中国伝統文化の世界である。曹禺の隣家は曹禺家が私塾教師を招いたのを知ると、自家の子供を共に学ばせた。曹禺は、この子供とフランス租界の映画館（光明電影院）に映画を見に行くこともあったという。また、曹禺の家から近い教会にも通いキリスト教の雰囲気にも触れた。ただし入信はしなかった(7)。ここにも、古さと新しさが同居している曹禺の文化資質をみることができる。

一方で、曹禺はこの頃から、父親が購読していた『東方雑誌』『少年』という時事雑誌を読むようになった。『東方雑誌』は1904年創刊、商務印書館発行で1948年に停刊するまで、中華民国期を代表する総合雑誌である。葉聖陶が編集していた『少年』も、進歩的傾向の雑誌である。このように曹禺は、10歳に満たずに大人の雑誌を読むことができ、彼も神童と呼ばれた。このあと数年父親が曹禺に読ませ曹禺自身も好んだ書物として、『紅樓夢』『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『封神榜』『聊齋志異』などが挙げられている。明清の代表的白話小説である。また比較的創作時期が新しい清末小説の『鏡花縁』『老残遊記』『二十年目睹之怪現狀』『官場現形記』『九尾亀』にも親しんだという。

また曹禺のその後をみるうえで重要なものに『戯考』の閲読がある。『戯考』とは、京劇のあらすじ集で、重要な歌唱のさわりも載っている。これを曹禺は繰り返し読んだという。この読書体験も、その後曹禺が劇作家として育っていくうえで、無視できない影響を与えたことであろう。

曹禺の幼年期には、『新青年』に拠る新文化運動や1919年の五四運動が起こり、その後の中国に決定的な影響を与えていくのだが、曹禺の回想からは直接の影響は窺えない。

しかし、時代の影響は少しずつ曹禺の身の上にも及んでいく。1920年『域外小説集』増訂版が上海群益書社から刊行されると、曹禺はただちに買い求め閲読したという。『域外小説集』は、魯迅、周作人兄弟が1909年に東京で刊行した翻訳小説集で、英・米・仏の作品のほかに、ロシア、チェコ、ポーランド、フィンランドのような、あまり注目されない国の小説を集めているところに特色があった。刊行時にはほとんど売れなかったのだが、魯迅が『狂人日記』などで名声が高まり、増訂版が刊行されたのだろう。また、この年曹禺は私塾学習を終え、万徳尊は曹禺を天津官銀号漢英学館に入学させ、英語を学ばせた。この学校の詳細は、今日わからなくなっている。

曹禺は1921年頃から外国文学との接触を始めた。前年の『域外小説集』からすでに始まっていたのだが、この頃から本格化した。曹禺が印象が深かった作品として挙げているのは、ハウプトマン『織工』、ゴーゴリー『巡按』、シェイクスピア『ベニスの商人』（あらすじ）、ドーデ『最後の授業』、デフォー『ロビンソン漂流記』などである。『最後の授業』

の印象が最も深かったという。また、作者不詳の『リンカーン伝』も、曹禺に強い印象を与えたという (8)。

そして曹禺は 1922 年 13 歳で南開学校に入学し、その視野をいっそう広げていくことになるのである。

4. 南開学校と南開新劇団

ここで、南開学校と南開新劇団について確認しておきたい (9)。

南開中学は、張伯苓 (1876-1951) が嚴修 (嚴范孫、1860-1929) と共に創立した私立学校である。1904 年に天津“私立中学堂”の名称で創立され張伯苓が監督 (校長) となった。その年のうちに“敬業中学堂”と名称変更し、翌 1905 年には“私立第一中学堂”に、1909 年に“南開中学堂”に、1911 年に“南開学校”となった。本稿では、南開学校で統一する。1919 年には南開大学を開設した。南開学校は英語を重視していたので、曹禺は入学に先立って英語学校に通い、補習を受けていたのである。曹禺は、初級中学課程 (日本の中学に相当) 二年生に編入された。

張伯苓は、天津人で天津北洋水師学堂に入り海軍軍人となったが、甲午戦争 (日清戦争) での北洋艦隊壊滅、列強の中国部分占領の屈辱などで新式教育による国力振興を志し、南開学校を開設したのである。

南開学校には、一つの特色があった。張伯苓は、清末開明思想の影響を受けて、演劇の重要性を認識していた。そして南開学校でも演劇を奨励したのである。上海ではすでに学校演劇が 19 世紀末からおこなわれていた。封建要素が強く残る民国初年代の天津では反対の声もあったが、張伯苓は押し切った。1909 年 1 月上演の張伯苓作・演出『用非所学』が、その最初とされている。1914 年、南開学校は文化団体の敬業楽群会を創設し、下部組織として演劇団、音楽団が置かれた。同年 10 月 17 日学校十周年記念に新劇『恩怨縁』が上演された。新劇とは話劇の当時の呼称である。特筆されるのは、この上演に後の中国の首相となる周恩来が参加していることである。同年 11 月 17 日、南開学校新劇団、略して南開新劇団の名称を用いるようになった (10)。南開新劇団は、華北地区での学校演劇の先駆けの一つとなった。

南開新劇団にとって重要な意義を持つのは、1916 年に張伯苓の実弟張彭春がアメリカ留学から帰国し、南開学校で教鞭をとるようになったことである (11)。張彭春 (1892-1957) は、南開学校の第一期生でもあった。張彭春は 1910 年義和団事件賠償金により胡適らとともにアメリカ留学し哲学、教育学を学んでいたが、同時に演劇にも興味を持ち演劇学についても造詣を深めていた。20 世紀 10 年代のアメリカ演劇は、リアリズムの演劇の全盛期であったので、張彭春もその影響を強く受けた。張彭春は南開学校着任後に南開新劇団副

団長になり、彼の演劇観に基づいて南開新劇団を指導したのである。

張彭春の劇作での代表作は1918年上演の『新村正』（新村長）であろう。上海で新しい教育を受けて帰郷した青年と、外国企業と結託して農民を搾取する封建地主層との対決が描かれている。台詞に天津方言が混じるものの、劇の構成はほとんど話劇とっていい。

周恩来は、1913年に南開学校に入学し1917年に卒業したが、在学中は南開新劇団で重要な役割を果たした。周恩来が1916年9月18日、25日に学内誌『校風』38期、39期に発表した「我が校の新劇観」（吾校新劇観）は、写実主義の語を用いて南開新劇団の演劇内容を分析した評論で、この評論は、中国で写実主義という語が使われている早い例として知られている。「我が校の新劇観」で展開されているのはかなり整ったリアリズム演劇論で、当時18歳の周恩来が独力で到達したとは思えず、かなり張伯苓や張彭春の影響があったことと思われる。「我が校の新劇観」は文革終結直後の周恩来ブームの中で再発見され、周恩来の知名度もあり、今日の中国で広く知られているが、南開学校後輩の曹禺が「読んだのは人民共和国建国後」（12）と語っていることからわかるように、同時代の演劇界にどの程度影響があったかはわからない。

5. 南開学校での曹禺、その文学的成長

曹禺は南開学校に入学した後、南開新劇団入団を希望したが、この頃の南開新劇団は1919年に開学した大学部（南開大学）学生が主になっており、曹禺は体がまだ小さいなどの理由で入団を認められなかった。入団が実現するのは、1925年4月頃に南開新劇団が団員募集をしているのをみつけてからである。

曹禺の南開新劇団での活動をみる前に、南開学校入学後の読書傾向と文学志向を確認しておきたい（13）。

曹禺が南開学校に入学した翌年の1923年、魯迅の第一小説集『吶喊』が刊行された。曹禺はさっそく『吶喊』を購入して読んでいた。このほか、葉聖陶の童話集『かかし』（稻草人）、郭沫若の詩集『女神』も読んだ、と回想している。『女神』の中で特に「鳳凰涅槃」に強い印象を受けたという。また、この頃文学雑誌の『創造』『小説月報』『語糸』を愛読していたという。『創造』は創造社機関誌で中国現代文学初期のロマン主義を、『小説月報』は文学研究会機関誌で写実主義を代表する文学雑誌である。『語糸』は魯迅グループの事実上の機関誌である。いずれも1920年代の代表的文学雑誌で、この頃の曹禺は、文学に対しても強い興味を持っていた。また、英語重視の南開学校の教育環境の中で、1925年16歳の時、英語でディケンズ『デビッド・カップフィールド』を読んだという。

曹禺は文学好きが高じて、1926年4月、17歳の時に南開中学の同級生など6、7人と語らって、文学団体玄背社を結成し、『玄背』を編集発行した。『玄背』のモットーは、「思

想、文芸、趣味”の三者を兼ね備えた刊行物」で、玄背という題名は辞書を適当にめくって出てきた玄、背を使ったという。当初は天津の新聞『庸報』の副刊（文芸付録）の形態で、一、二期は不定期刊、それ以後は毎週日曜日に刊行された。一度停刊した後、1927年10月半月刊で独立した雑誌として刊行された。注意すべきは、9月22日の第6期に曹禺が小説「今宵酒醒何処」を発表したことである。署名は曹禺で、これが彼が曹禺という筆名を用いた最初であった。「今宵酒醒何処」は夏震と梅璇という若い恋人たちの恋の行方を描いたもので、たいへん感傷的な内容だった。曹禺は、当時郁達夫を愛読していたので、その影響を受けた、と回想している。曹禺らは郁達夫に『玄背』を郵送していたが、郁達夫から『玄背』の清新さを賞賛する返信が届き、『玄背』第16期（1926年11月26日）に掲載したこともあった。曹禺はこのほか、『玄背』第13期（1926年10月31日）に詩「林中」「菊”、“酒”、“西風”」も発表している。いずれも秋の情景を描いた感傷的な口語新詩であった。

1927年18歳の時には、南開学校の学内誌『南中周刊』に時事エッセイも発表している。これは万家宝署名であった。また、上海の雑誌『国聞周報』に曹禺署名でモーパッサン「家主の奥さん」（房東太太）の翻訳を発表している。おそらく英語からの重訳であろうが、これは曹禺が外国文学を翻訳した最初であった。曹禺がなぜ上海の雑誌と関係をもったかは不明である。1928年には、『南開双刊』に父親の死に触発された長詩「まもなく、まもなく」（不久長、不久長）を発表している。

これが、南開学校時代の曹禺の主要な文学活動である。10代の少年としては、活発な文学創作活動と言えるだろう。しかも曹禺はこれと平行して、次節で述べるように演劇活動もおこなっていたのである。

1928年6月、19歳の曹禺は南開中学を卒業した。父親の万徳尊は自身が不遇だったので曹禺が官界に進むことに反対し、医師は間違いの無い職業だと曹禺に医科大学受験を強く勧めた。万徳尊は1928年2月に逝去していたが、曹禺は父の遺訓に従い協和医学院を受験した。しかし合格できなかった。曹禺の南開学校での成績は優秀だったので、曹禺は南開大学政治系に入学することになった。1929年再度協和医学院を受験したが、やはり合格できなかった。1930年には、南開大学出版社文芸組職員にもなっている。しかし曹禺は、政治学や経済学に興味を持たず、1930年には清華大学文學院西洋文学系の編入試験を受け合格し、南開大学を去ることになる。文學院西洋文学系という立身出世と縁のない分野を選んだのは、万徳尊がすでに逝去していたこともあろう。

6. 曹禺と南開新劇団

すでに述べたように、曹禺が南開新劇団に参加するのは、南開学校入学三年後、1925年

の時である。16歳であった。南開新劇団は、同年5月2日、3日に卒業公演として『若奥様の扇』（少奶奶的扇子）上演を計画していた。『若奥様の扇』はワイルド『ウィンダム嬢夫人の扇』を洪深が翻案したもので、一年前の1924年5月に上海戯劇協社が上演し、大成功を収めていた。この公演は、今日では話劇を確立させた公演として、知られている(14)。この後、各地の学生劇団で上演されていた。曹禺は上演台本を暗記するほど何度も読み返したという。曹禺がどの役を演じたのか、回想では言及されていない。俳優ではなくスタッフだったのかもしれない。この後、曹禺は南開新劇団の中心人物として活躍していく。

1926年には、上述の玄背社結成で多忙であったのか、南開新劇団での活動は記録されていない。しかし曹禺はこの年京劇『走雪山』（南天門の一部）を演じている。「走雪山」は義侠心に富む召使いが主人の娘を実家に送り届けるという内容で、曹禺は召使いを演じた。曹禺ののど（発声）はなかなかよく、継母の薛咏南は上演を観てたいへん喜び、曹禺を北京にやって京劇を本格的に習わせよう、と言ったという。

曹禺が南開学校で役を演じたのがはっきりしているのは、1927年9月2日の『愛国賊』上演からである。高級中学三年生の卒業記念公演という形式であった。『愛国賊』は陳大悲が1922年に『戯劇』第二巻第一期に発表した一幕劇である。北京の金持ちの家に入り込んだ強盗が、この家の主は売国の政治家であることを知り、売国の証拠を盗み出す。強盗が突然愛国の演説をするなど、文明戯の残滓がある。曹禺は主役の強盗を演じたという。この日は、田漢『虎狩りの夜』（獲虎之夜）も演じられたが、この劇には曹禺は俳優としては参加していない。この卒業記念公演は9月9日にも、『虎狩りの夜』『圧迫』『かわいそうなペイジャ』（可憐的斐迦）を上演している。『かわいそうなペイジャ』は、ロシアの劇作家ヤンバイ（巫穆柏、音写）作的一幕劇で、曹靖華の訳である。曹禺はこのうち『圧迫』に俳優として参加した。『圧迫』は丁西林的一幕劇で、曹禺は女性客を演じた。当時、男女合演はすでに確立していたが、南開学校では適当な女子学生がいなかったか、あるいは北方ではまだ男女合演は抵抗があったのか、女性役も男子学生が演じていた。

『圧迫』が好評だったのか、曹禺はまもなく大役を演じることになる。イプセン『民衆の敵』（国民公敵）である。曹禺は主人公の医師ストックマンの娘ベートルの役であった。曹禺は南開学校を卒業し、南開大学学生になっており、引き続き南開新劇団に参加していた。

『民衆の敵』は1927年10月17日南開学校創立記念日（校慶）に公演が予定されていたが、稽古中に演出の張彭春は突然上演中止を申し渡した。天津の軍閥で直隸督弁の褚玉璞が、『国民公敵』という題から自分を攻撃する劇だと誤解し、上演禁止を通知したのである。幸い、まもなく褚玉璞は失脚したので、イプセン生誕百周年を記念して翌1928年3月23日、24日に『強情な医師』（剛愎的医生）と題名を変えて南開学校礼堂で上演された。た

だし、(An Enemy of the people)と英語で題名を添えた。会場は満員で、学生が主体の観客の観劇態度もよかったという。曹禺のベートルは好評で、そのため曹禺はまもなくより大きいイブセンの大作を演じることになる。『人形の家』のノーラである。

それに先だって、4月27日には未来派戯曲『夫を換えよう』(換個丈夫吧)を演じた。これはあまり反響を呼ばなかったようで、内容もわからなくなっている。

南開新劇団の『人形の家』は『ノーラ』(娜拉)の題名で1928年10月17日、20日に南開礼堂で上演された。『人形の家』中国語訳は、この時までには胡適・羅家倫『娜拉』(『新青年』第4巻6号、1918年)、陳嘏訳『傀儡家庭』(商務印書館「説部叢書」第3集第51編、1918年)、潘家洵訳『娜拉』(商務印書館『イブセン集(一)』、1921年)があったが、誰の訳を使用したのか、今日ではわからなくなっている。演出はやはり張彭春である。公演を盛り上げるため、公演前日の10月16日に天津の新聞『大公報』に、“ある南開学生”(一個南開学生)署名の『ノーラ』について(「關於『娜拉』」)と題する紹介記事が掲載された。この記事は、曹禺(万家宝)のこれまでの演技を高く評価し、「観客を満足させられると信じている」と記している。

『人形の家』は五四新文化運動時期の中国に大きな影響を与えた。それから約10年たち、当時のような熱狂的歓迎は薄らいでいたが、それでも世界的作品としての名声は高かった。曹禺がノーラを演じ、張平群が夫のヘルメルを演じた。この二人は、前年に丁西林『圧迫』を演じた仲でもあった。10月17日は南開学校の開校記念日であり、小学部、中学部、女子学部、大学部のすべてが出し物をした。『ノーラ』は大学部の出し物として演じられた。午後7時、張彭春が簡単に『人形の家』紹介をした後、趣劇『千方百系』が上演され、その後『ノーラ』が上演された。満席で、上演終了時にはすでに深夜になっていた。

この上演が刺激になったのか、公演終了後に刊行された学内誌『南開大学周刊』第63期(11月2日)、第64期(11月9日)にはイブセンを紹介する評論が掲載されている(賈問津「娜拉」、顔毓蘅「易ト生」)。残念ながら、上演の成果については触れておらず、劇評とは言えない。このほか、天津婦女会は天津で『人形の家』が上演されるのは重大なできごとで女性解放運動の助けになるとして、特に南開新劇団に依頼して再演させたという(15)。

この上演を観た観客の回想が残っている。

「私は初級中学に入学した時、曹禺が演じる『圧迫』を観た。よく演じていたが、まだ多少アマチュアの味が残っていた。後に曹禺が演じる『ノーラ』を観た。男性が女性役を演じてあんなにも良い。確かに私を呆然とさせた。(中略)私はいつも、曹禺の天才は俳優にあり、劇作家はその次だと思っている。私のこの結論を、皆さんは下すことができない。彼の演技を観ていないので、下すことができないのだ。私のように観たことがある者だけが、この決して誇張ではない結論を下すことができるのだ。」(16)

これらを見ても、この『人形の家』公演の成功ぶりを知ることができるだろう。上演の成功は、単に演技の才能だけではなく、曹禺が戯曲をよく読み込み、役の性格を十分に把握していたことも挙げられるであろう。

1929年に曹禺は6月14日の卒業生大会で再び『圧迫』を演じ、好評を博した。この年は南開学校創立25周年にあたっており、創立記念日には、ゴールズワージーの戯曲に基づき改訳（翻案）した『争強』を10月17日、19日上演した。曹禺は、主役の一人で資本家の安敦一を演じた。この上演も大きな反響を呼び、26日に再演された。『争強』はその後『雷雨』に至る曹禺の演劇上の歩みの中で重要な位置を占める作品と思われるので、節を改めて検討したい。また同年、改訳戯曲『奥様』（太太）を『南開大学周刊』第74期（12月10日）に、改訳戯曲『冬夜』を『南開大学周刊』第77期（12月1日）に発表している。いずれも小石署名であった。同年12月、張彭春が再度アメリカに視察に行くにあたり、張彭春は曹禺に英語版『イブセン全集』を与えた。曹禺は、その時の自分はまだ英語の水準も高くなく、わからないところもあったが、影響は非常に大きかった、と述べている。

7. 『争強』を巡って

『争強』はイギリスの小説家、劇作家のゴールズワージー（John Galsworthy、中国語表記は约翰·高尔斯华绥、1867～1933）が1909年に発表した戯曲 *Strife* を人名や地名などを中国に改め全体をかなり圧縮して改訳したものである。原作の基本内容は保たれている。ゴールズワージーは20世紀前半のイギリスのリアリズム文学を代表する小説家、劇作家とされ、1932年にはノーベル文学賞を受賞した。ゴールズワージーの作品は中国でも歓迎され、1921年民衆戯劇社が『戯劇』を創刊した際には、1906年発表の戯曲『銀の箱』（*The Silver Box*）が陳大悲の訳により、『銀盒』の題で第一期、第三期、第五期にわたって連載された。陳大悲はほかにもゴールズワージー戯曲をいくつか訳している。

Strife は、中国では郭沫若によって『争闘』の訳名で翻訳され（17）、中華民国15（1926）年に商務印書館より刊行された。なお *Strife* は日本でも1920年にジョン・ゴルスウオーシイ作、和氣律次郎訳『争闘』（労働文藝叢書第4編、叢文閣）として出版されている。郭沫若は翻訳にあたって和氣律次郎の日本語訳を参照したかもしれない。このほか改造社文庫（ジョン・ゴルスウオーシイ著、和氣律次郎訳、1930年）、岩波文庫（ゴールズワージー作、石田幸太郎訳、1934年）でも刊行されている。訳名はいずれも『争闘』である。

このように『争闘』はかつては中国や日本でかなり広く歓迎された。今日ではゴールズワージーは小説家としては今も作品が刊行されているが、劇作家としては今日では『争闘』も含め忘れられた感があり、上演や出版の消息を聞かない（18）。

『争闘』のあらすじは、次のようなものである。ある鉛板会社で三ヶ月にわたるストラ

イキが続いている。会社上層部の資本家は株価の下落を恐れ、労働者も疲れ果て、どちらも妥協したがっている。しかし会社社長のジョン・アントニーと労働者代表の一人のダビット・ロバーツは双方とも強硬で、妥協に反対している。最後に、アントニーは他の資本家によって解職され、労働者たちもロバーツの背後で他の代表が会社と妥協し、ストライキは終結する。劇中の時間はわずか数時間で、その間に資本家と労働者の対立、双方の内部対立など複雑な内容が展開される。

この『争闘』を脚色した『争強』を、上述のように南開新劇団は1929年10月に上演した。開校25周年記念日上演作品に『争闘』を選んだのは、張彭春であった。彼は郭沫若訳には上演の面から満足できず、曹禺に改訳するように命じた。曹禺は夏休みをまるまる費やして改訳に取り組んだという。人名、地名などは中国に置き換え、題名は『争強』とした。『争強』の台詞からは翻訳調は消え、後の曹禺作品に通じる滑らかな台詞運びになっている。

しかし、『争強』は単純な改訳ではなかった。『雷雨』など曹禺作品を読んだ木下順二、大笹吉雄らは、曹禺戯曲の長いト書きに強い印象を受けたと述べている(19)。中国文学研究者の白井啓介も、ト書きの長さに言及している(20)。近代劇はそれまでの劇文学と比べてト書きが長くなる傾向があるのだが、『雷雨』から最後の戯曲作品の『王昭君』まで、曹禺作品のト書きの長さはその中でも群を抜いている。その特徴が、『争強』にすでに現れているのである。

たとえば、第一幕冒頭のト書きをみてみよう。原作の比較的忠実な訳である郭沫若訳『争闘』では、ト書きは250字程度である。安德武(Underwood)のダイニングルームの状況と六名の資本家側登場人物が簡潔に紹介される。ところが、『争強』では同じ場面のト書きが約1,000字に増加しているのである。ダイニングルームの状況は、『争闘』のト書きではこうである。

「正午、アンダーウッド家のダイニングルーム。壁の暖炉では炭火が赤々と燃えている。暖炉の傍に両開きのドアがあり、客間に通じている。別の側に単開きのドアがあり、外の廊下に通じている。部屋には長い食卓が一つあり、テーブルクロスはなく、会議用である。」

(21) このあと、人物紹介が続いている。

同じ部分が、『争強』ではこうなっている。

「広く豪華なダイニングルーム。いたるところに暖かく快適な雰囲気があふれている。床にはぶ厚く柔らかい絨毯が敷かれ、真ん中に西洋式食卓がある。食卓の周囲には、濃い赤の革張り椅子が並べられ、テーブルの両端は、とりわけ豪華である。テーブルには濃い紫のテーブルクロスが掛けられ、座るところには墨と筆や茶碗が置いてあり、重役たちの会議用である。舞台左側には壁の暖炉があり、暖炉の上には、石の彫刻、時計など小さく精

巧なものが置いてある。この時暖炉の火は赤々と燃え、室内は春のように暖かい。右には大きな窓があり、外の荒れ果てた集落や雪の野原が見え、銀の光を放っている。時には窓の外の枯れ枝が風に揺れており、晩冬のうらぶれた情景を示している。窓の前（舞台のはずれ）には一卓の置き机と二脚の椅子があり、机の上には茶器や灰皿などがある。

室内には三つのドアがある。真ん中のドアは両開きで、後ろの客間に通じている。左の壁には二つドアがあり、暖炉の両側である。みな外に出る廊下に通じている。壁には金の縁取りの色彩画が掛けてあり、両開きドアの右側には小さなガラス棚があり、中に骨董が置いてあり、左側には椅子が二脚置いてある。」(22)

このあと、やはり長文の人物紹介が続くのである。『争強』のト書きは、ほとんど創作といってもいいことが理解できる。長いト書きという曹禺戯曲の特徴は、『雷雨』以前にすでに始まっていたのである。

『争強』は人物などを中国に置き換えてあることはすでに述べたが、ここにも注目すべき点がある。『争闘』の鉛版会社総理である約翰安東尼(John Anthony)は、大成鉄鉱董事長(会長)の安敦一となっている。原作の工場が鉱山になっているのは、1920年代末の中国では大量の労働者が長期ストをする工場は考えにくかったからかもしれない。しかし、曹禺作品で鉱山会社の董事長(会長)といえ、鉄鉱と炭鉱の違いはあっても、『雷雨』の周ト園がすぐに連想されるのではないだろうか。周ト園は上述のように父親の万徳尊がモデルとされてきた。これ自体は事実であろうが、万徳尊は資本家ではない。周ト園の資本家要素には、おそらく『争強』の安敦一の影がある。しかも、周ト園も安敦一も、労働者のストに対して強硬な姿勢で臨むのである。

『争強』の人物で注目すべき点はほかにもある。労働者代表の大衛羅伯池(David Roberts)は、羅大為となっているが、この人物も『雷雨』の労働者代表の魯大海と似通っている。どちらも強硬なスト実行派で、しかも仲間の他の労働者代表に裏切られ、ストは終結するのである。羅大為(LUO Dawei)と魯大海(LU Dahai)は、発音も似ているように思われる。『雷雨』の魯大海にも、『争強』の羅大為の影がある、とみなしてよいであろう。安敦一ら資本家側と羅大為ら労働者側が対決する『争強』第一幕の場面は、周ト園と魯大海が対決する『雷雨』第二幕後半部を彷彿とさせる、と私には思われる。

これまで、『雷雨』の魯大海は、曹禺の回想をもとに1931年9月18日の柳条湖事変(満州事変)後に抗日宣伝のため保定へ出かける列車の中で出会った労働者がモデルとされてきた(23)。これ自体も事実であろうが、『争強』すなわちゴールズワージー『争闘』も、その原型の一つと考えてよいであろう。また、安敦一の娘の呉安綺麗(『争闘』の茵尼徳安徳武、Enid Underwood)は羅大為の妻と同級生で、第二幕第一場で労働者に同情してストを終結させるよう羅大為を訪ねて拒絶され追い返されるが、この場面も『雷雨』第三幕の

周冲が四鳳・魯大海の家を訪ねて魯大海に追い返される場面を彷彿とさせる。『雷雨』にはイプセン『幽霊』に似た家庭劇の要素と同時に、周ト園と魯大海の関係のような社会問題、階級闘争の要素もあるが、後者の要素はゴールズワージーが重要な源泉の一つであろう。

『争強』改訳は、曹禺にとって『雷雨』に至る重要な一段階であったのである。『争強』は翌1930年に南開新劇団叢書の一冊として出版された。出版元は南開新劇団である。南開新劇団改訳となっているが、主に曹禺の手によることはすでに述べた通りである。『雷雨』と『争闘』の関係は、これまでの曹禺研究ではあまり触れられたことがないものである(24)。

曹禺は『争強』で改訳に興味を持ったのか、このあと1929年、上述のように『奥様』『冬夜』を改訳している。この二つはいずれも一幕劇で、技巧的には面白いが、深い社会内容をもつものではない。しかしこの両者は、当時北平(北京)、天津地区の学校演劇で盛んに演じられた、という。

1930年秋、曹禺は清華大学に編入学し、南開大学を離れ、南開新劇団とも直接の関係はなくなる。清華大学では1931年5月2日、3日に清華大学慶祝20周年記念活動に参加、再び『人形の家』ノーラを演じた。この公演の題名は「娜拉」だったようである。このノーラも高い評価を得たが、公演全体は準備不足であまり良い舞台ではなかったという。この『人形の家』が、曹禺が女性役を演じた最後になった。

曹禺はこのあと、同年11月6日に西洋文学系学生交流会で『ハムレット』独白を朗唱し、同年冬に抗日劇『馬百計』上演に参加、1932年には、ゴールズワージー『最初と最後』(最先与最後)上演に参加した。また、王文顕教授の指導で西洋文学への理解を深め、図書館でさまざまな文学名作を読みふける。1933年に清華大学卒業、卒業論文は英文の「イプセン論」だった。(残念ながら、この「イプセン論」は残っていない。)また、1932年に山西、内蒙古を、1934年に日本を旅行(25)し、見聞を深めている。

一方では、1933年夏頃から『雷雨』執筆を開始、図書館二階閲覧室が主な執筆場所だった。約半年で『雷雨』を書き上げ、1934年7月、巴金の慧眼により『文学季刊』第一卷第三期に『雷雨』が全文発表され、曹禺と『雷雨』は世に出ることになる。

8. 南開新劇団の活動が曹禺に与えた影響

以上の経歴から、南開新劇団が曹禺に与えた影響の大きさは明らかであろう。

まず、演劇上演の実際を知ることができたことである。学者ではなく劇作家として、このことは大きい。

次に、イプセンやゴールズワージーと出会い、その作品上演に俳優として参加するなかで、イプセンやゴールズワージー作品が濃厚に持つリアリズムに対する理解を深めたことである。張彭春から英文版『イプセン全集』を送られ、その大半を読んだことも、挙げておいてよ

い。清華大学の卒論にイプセンを選んだことも、曹禺へのイプセンの影響の大きさを示すものであろう。

更に、ゴールズワージー作品などの改訳によって、戯曲創作の技法を習得していったことである。

中国では、曹禺はしばしば“中国のシェイクスピア”と呼ばれる。曹禺の芸術達成度の高さに敬意を表してだが、作品の内容や構成からいうと、曹禺はイプセンに代表される台詞に依拠した緊密な近代劇の形式をとっており、“中国のイプセン”と呼ばれる方がふさわしい。そしてその文学的、演劇的基礎が南開学校、とくに南開新劇団に参加する中で培われてきたことも、これまで述べてきたことから証明できるであろう。

曹禺の幼少時から南開学校時代の文化素養の蓄積を振り返った時理解できるのは、まず京劇、文明戯、白話小説など中国伝統通俗文芸を受け入れ、次に四書五経など文言伝統文化に接し、そのあと更にイプセンなど西洋近現代文芸を受容しているということである。この文化受容の多様性は、曹禺の『雷雨』以降の創作にも大きな影響を与えている筈だが、これまでの研究はその事実は指摘しつつも、掘り下げた分析はまだ十分とは言えない。

曹禺の南開学校、南開新劇団での文学、演劇活動を考察した時もう一つ理解できるのは、キリスト教の色彩がほぼ皆無であることである。イプセンやゴールズワージーの社会問題劇は、時には反キリスト教の要素すらあり、郁達夫の作風もキリスト教とは遠い。曹禺が訳した限りでのモーパッサン作品も同様である。周知のように、曹禺が南開学校を離れて三年後に執筆した『雷雨』には序幕・尾声を中心に濃厚なキリスト教色がある。このキリスト教色はどこからもたらされたのか。これは、筆者の次の研究課題である。

注

1. 本稿の記述には、田本相・阿鷹編著『曹禺年譜長編』上下（上海交通大学出版社、2017年）に負うところが多い。そのほか参照した中国での伝記研究には、田本相『曹禺伝』（十月文芸出版社、1988年）曹樹鈞『「神童」曹禺—曹禺成才之路』（上海教育出版社、1998年）、田本相・劉一軍『苦悶的靈魂—曹禺訪談録』（江蘇教育出版社、2001年）などがある。
2. 「万钢到潜江视察拜谒曹禺陵园」荆楚网 2012年07月16日报道。
http://hb.sina.com.cn/news/j/2012-11-22/113934110_2.html 2019年11月9日閲覧。
3. 『曹禺年譜長編』上 p6。
4. 曹禺『雷雨』の家庭環境の性格については、瀬戸宏「曹禺『雷雨』の近代性」（『野草』65号、2000年2月）を参照されたい。
5. 本稿での曹禺の年齢は、『曹禺年譜長編』に従い数え年を用いている。
6. 文明戯については、瀬戸宏『中国話劇成立史研究』（東方書店、2005年2月）を参照されたい。
7. 注1で挙げた文献のほか、牧陽一「キリスト教的悲劇としての曹禺の『雷雨』『日出』『原野』について」（『日本中国学会報』第42集、1990年）に指摘がある。
8. 『曹禺年譜長編』上 p32。
9. 南開新劇団については、崔国良主編『南開話劇史料叢編』編演紀事卷、劇論卷、劇本卷（南開大学出版社、2009年10月第1版）があり、本稿も多くを負っている。
10. 崔国良主編『南開話劇史料叢編』編演紀事卷。
11. 張彭春の演劇論などについては、黄殿祺編『話劇在北方奠基人之一：張彭春』（中国戯劇出版社、1995年）、崔国良・崔紅編『張彭春論教育与戯劇芸術』（南開大学出版社、2003年）がある。
12. 曹禺『南開話劇運動史料（1909—1922）』序、『南開話劇史料叢編』劇論卷収録。
13. 曹禺が南開学校時代に発表した文芸作品はすべて崔国良編『曹禺早期改訳劇本及創作』（遼寧大学出版社、1993年）に収録されており、本稿も多くを同書に負っている。
14. 瀬戸宏『中国の現代演劇 中国話劇史概況』（東方書店、2018年9月）など参照。
15. 陸善枕述、郭榮生記「南開新劇団略史（1935. 12. 8、9）」、『南開話劇史料叢編』編演紀事卷収録。
16. 田本相・劉一軍編『苦悶的靈魂—曹禺訪談録』（江蘇教育出版社、2001年） p226。
17. 一部の中国語文献は訳名を『鬭争』としている。
18. 日本でのゴールズワージー劇作研究には、伊ヶ崎賢一「芸術に於ける社会性の限界 —ゴールズワージーの劇作について—」（『奈良学芸大学紀要』第3巻1号、1953年）、伊ヶ崎賢一「ゴールズワージーの「斗争」とわが演劇への示唆 —主としてその構成を通じて—」（『奈良学芸大学紀要』第4巻1号、1954年）などがある。
19. 木下順二「曹禺」（『郁達夫・曹禺』、『現代中国文学』6、河出書房、1971年収録）、大笹吉雄『ドラマの精神史』（新水社、1983年）。
20. 白井啓介「『雷雨』の舞台指示曹禺戯曲研究への一つの模索」（『中国文化漢文学会会報』第52号、1994年）。

21. 郭沫若訳『争闘』（商務印書館、1926年）p5。引用部分は郭沫若訳の重訳で拙訳。引用部分の英語原文は “*It is noon. In the Underwoods' dinining-room a bright fire is burning. On one side of the fireplace are double doors leading to the drawing-room, on the other side a door leading to the hall. In the centre of the room a long dining-table without a cloth is set out as a board table.*” 高尔斯華綏, J 著、徐燕謀注訳『闘争』p3（商務印書館、1959年）で、ほぼ忠実に訳されている。
22. 崔国良編『曹禺早期改訳劇本及創作』p5（『争強』部分）。
23. 田本相『曹禺伝』p148。
24. 朱棟霖『曹禺 心霊的芸術』（北京大学出版社、2010年）p20に『争強』と『雷雨』の影響関係の指摘があるが、厳密には『争闘』の影響とすべきであろう。
25. 鈴木直子「曹禺にみる日中交流」（『演劇映像学：演劇博物館グローバルCOE紀要』2010年2）。鈴木直子には、「五四時期の学生演劇：天津南開新劇団と北京大学新劇団」（『お茶の水女子大学中国文学会報』27号、2008年）もある。

Abstract

CAO Yu is a playwright who represents both modern Chinese drama and literature. CAO Yu announced his work, *Thunderstorm*, by the age of 24. *Thunderstorm* is the debut work of his career and one of his masterpieces. This paper considers his growth as a playwright, and focuses on the activities at Nankai New Drama Company, where he participated during his junior high and high school days. The paper is organized in the following way: 1. Introduction; 2. CAO's family background; 3. CAO's cultural background; 4. Nankai school and Nankai New Drama Company; 5. The influence of CAO's activities at Nankai school on his literary growth; 6. CAO Yu and the Nankai New Drama Company; 7. around *Strife*; 8. The influence of Nankai New Drama Company on CAO Yu. In particular, the multi-layered nature of CAO's culture and Ibsen and Galsworthy's influence on his work are emphasized.